

ワークショップ型詩創作指導による学びの形成

— Arvon Foundation の取り組みの検討から —

中井悠加*
(2015年12月7日受理)

Developing the Learning Through Workshop-Styled Teaching Poetry Writing: A Focus on the Effort of the Arvon Foundation

Yuka NAKAI

Abstract. How to create the place of teaching poetry writing is an essential matter for children to explore the possibility of language through poetry writing which has limitless style. In Britain, there have been traditionally an educational philosophy which gives importance to create the place where children communally can learn each other, which is treasured as a workshop-styled teaching even now. The purpose of this article is clarifying the significance of workshop-styled teaching poetry writing through examining the effort of Arvon Foundation that provides a lot of courses of creative writing workshop for all writers in Britain. I reported a course which I myself attended and examined how the tutors lead their workshops. As a result, I found the structure of workshop makes participants to immerse in their writing and its function that cultivates the ability to support their learning: self-affirmation, empathy, continuity and patience. It brings a perceptual change regarding the role of teaching poetry writing in Language Arts and opens the door to fulfill a sustainable teaching poetry writing as a community of writing poetry, not a community of poets.

1 研究の目的

詩は、ひとのことばを用いたあらゆる表現試行であるため、その表現方法は無限に存在するといえる。詩創作を指導する上で、それぞれの表現方法がことばのどのような働きにどう切り口を入れることで開発されたのかということを検討することは、子どもたちが詩創作を通じてことば表現の可能性を切り拓いていくことにとって重要である。

ここで浮かび上がる課題は、様々に存在している詩の表現方法ひとつひとつを「詩創作」として教室で行う上で、それらの表現に意味をもたせる「場」をどのように作りあげるかということである。教室において作りあげられた「場」の質によって、詩創作をすることの意義がうまれるかどうかは左右される。様々な表現方法を検討すると同時に、それを有意義に実現するための指導の場の検討を行うことは、詩創作の意義と役割を明ら

かにする上で有効であり必要不可欠だと考える。

このことに関して国外に目を向けると、イギリスでは古くから共同で学び合う場づくりが重視された教育観が存在しており [Thornton 1974 : 29], それを実現するために「work-room (作業室)」型の教室が理想とされてきたという歴史を持っている [Mackey 1969 : 16]。そこでは、一人ひとりが積極的に参加して活動を展開していくことを重要視し、そのために教室の状況をふまえた指導が行われることが必要とされていた。その教育観はワークショップ型の指導として現代にも受け継がれ、「書くことへのプレッシャーを軽減する」ことや「積極的な創造への参加」を実現することは学びを生み出すための前提・土台となるものだと考えられている [Locke 2010 : 367; 中井 2012 : 149]。

そこで本稿では、イギリスにおいて全ての「書く人」を対象に様々なクリエイティブ・ライティ

*学習開発学講座

ングのワークショップを開いている Arvon Foundation (アーボン・ファンデーション) の取り組みについて、稿者自らが受講生として参加した実践を元に考察を行う。そうすることで学習者の視点も取り入れながらワークショップ型詩創作指導の具体的な分析を行い、そこでの指導とその効果について報告することを目的とする。

2 Arvon Foundation 概要

【背景】 Arvon Foundation (以下 Arvon) は1968年に詩人である John Moat と John Fairfax によって設立されたクリエイティブ・ライティングのための基金団体である。1968年に初めての講座が開かれ、1972年に株式会社となり、1973年にチャリティーとして登録される。その後、主に Arts Council of England (イギリス芸術評議会) からの支援を受けながら徐々に規模を拡大して今日に至る [Moat 2005:126]。もともとは、彼らのような詩人をはじめとしたすべての作家のために、書くことに集中することのできる場を提供するということが目的とされており、現在受講対象者は一般に開かれたものとなっている [Arvon 2011:6]。

そのように、子どもから大人まで全ての人を対象としたクリエイティブ・ライティングに関するワークショップはイギリスにおいて他にも数多く開かれている¹。その中でも Arvon のワークショップは、「伝統的な教師/子ども (teacher/ pupil) の関係とは意図的に異なるモデルを提供する」 [Wandor 2008:13] ものとして多くの教育者によってその受講を強く推奨されており、国語教師や小学校教員向けの創作指導に関連した書籍などで最も多く紹介されている。その多くは子どもたちが参加するものとして紹介しているが、同時に教師に対して指導力をつけるために有効なものとしてその参加を推奨されることもある²。特に設立当初は、大学の教員養成課程の中に設けられていた「活動週間 (Activity Week)」を利用することで連携を図り「教員養成の学生のために運営した講座」を開いたり、現在でも教育実践者のための特別待遇 (Teacher's Grant: 教員のための奨学金) を採用したりと、教育と密接に結びつきながら体系化されてきている [Moat 2011:7]。そうした取り組みが、他に存在する団体と一線を画す要因ともなっているといえる。わが国にも小規模な創作

ワークショップは見受けられるが、Arvon のように教育と結びついた上で体系化されたものは存在しない。

【特徴】 Arvon は4つのライターズ・ハウスと呼ばれるイギリスの伝統家屋を地方にかまえ、毎年詩や物語、演劇、ラジオ、脚本、テレビ番組、ノンフィクションなどの様々な「書くこと」に関する5日間の宿泊講座を年間で約100回開いている³。インターネットを絶ち、書くことに集中した時間を十分に確保することができるような環境が用意され、チューターとして Arvon と契約したプロの詩人や作家による「専門的で実践的な指導」 [Arvon 2011:6] がそこで行われる。各講座につきチューターは2人、参加者は15人を限度としており、その規模は比較的小さいものである。

【講座概要】 報告する講座情報は以下の通り。

日 時 : 2011年9月5日(月) - 10日(土)

講 座 名 : STARTING TO WRITE POETRY
(詩を書き始める)

場 所 : Totleigh Barton (Devon 州)

チューター : Antony Dunn, Catherine Smith

ゲスト詩人 : John McClough

参 加 者 : 稿者を含め14人

この講座説明には「初心者を書き手や、何か新しいものを試してみたいと思っている人に向けた講座」 [Arvon 2011:90] と示されており、詩創作の入門編として位置づけられている。詩に関するワークショップには、「詩を書き始める (starting to write poetry)」「詩 (poetry)」「高度な詩 (advanced poetry)」の3種類があり [Arvon2011:6]、それぞれを入門編、中級編、上級編として位置づけることができる。本ワークショップは、参加者の層や時間的なことを考慮すると厳密には学校教育とは異なる。しかし、活動内容やチューターの言動からワークショップ型詩創作指導のエッセンスを捉えるための重要な資源となると判断した。なお、以降の記述は、録音した音声・映像の文字起こしデータ、ワークショップ中のメモ・日記に基づいたものであり、正確性に努めた。また発言等は随時稿者による試訳を施している。

3 ワークショップの実際

3-1 ワークショップの日程

〈表1〉は本講座の活動概要を示しており、そ

表1 ワークショップの日程

	朝	昼	夜
月	18:00に全員集合		1. ことば合わせ
火	2. 直喩と隠喩 (パートナーの特徴) 3. 五感① (セーターの詩) 4. 五感② (職業の詩) 【 <i>The Jaguar</i> (Ted Hughes)】 5. 視覚的な動き 【 <i>About His Person</i> (Simon Armitage)】	自由時間	チューターによる詩の読み聞かせ
水	6. 自分の名前 7. 私が信じているもの 【 <i>What I believe</i> (Michael Blumenthal)】 【 <i>What Do I Really Believe?</i> (Selima Hill)】 8. シフト・ボエム (パーティーと葬式)	個人指導①	ゲスト詩人による詩の読み聞かせ
木	9. 日常生活と比喩 【 <i>Killing Time</i> (Simon Armitage)】 10. 動物の詩 (×3篇) 11. バレンタインの詩 【 <i>Valentine</i> (Carol Ann Duffy)】	個人指導②	詩の朗読会①
金	12. 過去の体験 【 <i>Hubris</i> (Neil Rollinson)】 【 <i>The Clasp</i> (Sharon Olds)】 13. まきもどす詩 【 <i>Home Movies</i> (Michael Laskey)】 14. 擬人化 【 <i>A stone in a drystone wall</i> (Peter Sarson)】	自由時間	詩の朗読会②

それぞれの活動の名前および番号は便宜的に稿者がつけたものである。

5日間の基本的な日程は全ての講座に共通しており、朝に書く時間、昼に個人指導、夜に朗読の時間が設定されている。朝の書く時間では、1～14の各活動につき1つの詩を書くことを中心としながら、【 】で示した詩作品を読む場面も多く見られる。書く時間に関しては後述する。

昼に設定されている個人指導では、これまでのワークショップの中で書いた詩についての1対1のカンファランスが20分ずつ行われる。軽微な文法的誤り(冠詞や時制など)に加え、書いたこと自体を尊重し、講座が終わった後で再び書き直したりすることを示唆するような肯定的な発言が多くみられた。それは参加者にとって大きな励ましであり、非常に支援的なものであった。

夜には、前半は2人のチューターやゲスト詩人

によって自作の詩の読み聞かせが行われ、後半は参加者自身が詩を朗読する会が開かれる。「詩の朗読会①」では、ライターズ・ハウス内に設置されている図書室から気に入った詩作品を2編選び全員の前で1人ずつ朗読する。この時、それぞれの詩の詳しい解釈については触れられず、口頭で読まれたものを全員で共有するのみで次々に読んでいくという形をとる。この活動によって、自分の好きな詩を紹介できるだけでなく、合計32編という、チューターを含めた他の参加者の選択による様々な詩に触れることが可能となっている。

そして金曜日の午後までに、参加者はワークショップにおいて自分が書いた詩の中から2編選び、それらを一冊の詩集にまとめる。そして「詩の朗読会②」においてそれぞれが選んだ詩を朗読する。詩集の作成とその朗読に向けた詩の選出は、発表の場や読み手や聞き手に対する意識、5日間

の中で自分が取り組んできたことへの振り返り、自分が書いたものへの自己評価という意味でワークショップの中で最も困難な課題のひとつである。

以上のように、書く時間（詩をうみだす時間）と読む・聞く時間（詩にふれる時間）が交互になるよう設定され、最終的に刊行と朗読という形による発表の場によって締めくくられていることが分かる。うみだす時間とふれる時間が交互に設けられていることで、それぞれの時間に行う活動が有機的に作用し合い、メンバーの表現する力と読む力が相互に高められるような構成になっている。

3-2 ウォーミングアップ

次に、5日分のワークショップの内、書く時間を整理しながら実際の活動について具体的に考察する。〈表2〉は、月曜日の顔合わせの後で行われた「1 ことばあわせ」である。

この活動は、以降に続くワークショップに向けたウォーミングアップのような位置づけである。紙切れが1枚ずつ配られ、それぞれに建物や乗り物など「オブジェクト」（例えば映画館、学校、図書館、バス停、飛行機、自転車、駅など）と「素材」の名前（木、銀、麻、羽毛、草、砂、砂糖、バターなど）を1つずつ書き、一度集めてかき混ぜた後でもう一度1枚ずつがメンバーに配られる。そこで手元に届いた2つの名詞は、もともと何の関係もないものであるが、このようにかき混

ぜて組み合わせることで結びつけられ、日常では出会うことのできないような〈存在しそうなもの〉を生み出すという仕掛けになっている。ここでは〈存在しそうなもの〉として、「チョコレート」の駅」「綿の潜水艦」「ゴムの砂浜」「砂の井戸」「ベルベットの映画館」などが生みだされた⁴。

詩を書いている最中にチューターから投げかけられる質問の洪水に促されながら詩を書いていく。建物や素材の名前をひとつ紙切れに書く際にも、チューターは思いつく限りの例を次々に投げかけていた。与えられた例や与えられた質問をそのままことば集めや詩創作のアイデアとして用いることができるような手立てとなっていることが分かる。

ワークショップの初日にこのような簡単なルールに従ったゲーム方式で自動的にことばを組み合わせ詩を書いてみる活動が設けられていることによって、以降の活動に対する緊張感も緩和している。

3-3 書く時間

以上のような形で初日のウォーミングアップが行われ、翌日から本格的にワークショップが展開する。〈表3〉〈表4〉〈表5〉〈表6〉は、火曜日から金曜日のワークショップの詳細である。具体的に行われた活動を整理することで詩創作ワークショップの構成とその特徴について考察する。

表2 月曜日の活動（2011.09.05実施）詳細

	分	活動	活動の詳細
1 ことばあわせ	3	名詞集め①	1枚の紙切れに思いつく建物や乗り物、場所などの名前を書き、折ってボウルに集める。
	2	名詞集め②	違う紙切れに思いつく素材の名前を書き、折ってかごに集める。
	5	名詞を組み合わせる	ボウルとかごが回され、1枚ずつ取り「素材→オブジェクト」の順に1人ずつ読み上げる。
	10	詩を書く	上でできあがった組み合わせをタイトルにした詩を書く。チューターは書きながら『感触は？ においは？ 味は？ まわりの人はどうしている？ どう思っている？』とヒントになる質問を次々に投げかける。『可能性を楽しんで』とくり返す。
	15	数人が書いた詩を読む	『2連目が良かった、そこもう一度読んでくれる？』『砂の、ということばがアイデアを広げたね』『ことばをかき混ぜることができたね』と褒める。

『』はチューターである Smith の発言。「分」の列は各活動に要した時間。

表3 火曜日の活動(2011.09.06実施)詳細

	分	活動	活動の詳細
2 直喩と隠喩	4	直喩と隠喩についての説明	直喩と隠喩について説明し、「moon is like a lamp (月はランプのようだ)」と「moon is a lamp (月はランプだ)」との違いを確認する。
	13	パートナーについての詩を書く	2人組になり、パートナーの髪と目についてそれを美しい対象として1行に1つずつ比喩を使いながら2行書き、同様に醜い恐ろしい対象として2行書く。
	10	読み合う	それぞれに対して、『いいね、ありがとう』のみコメント。
3 五感①	3	五感について確認	1枚のセーターを回しながら、『五感は知っている? 何があるか言ってみて』と言い、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の5つについて確認する。
	20	五感を使って1行ずつ詩を書く	セーターについて1行ずつ質問→書く、という順番で進める。1行目:『何に見える? 見た目、サイズ、色、形を見ながら』2行目:『さわ心地、感触。どのように感じる?』3行目:セーターを床に落とし、『頭の中で、どんな音が聞こえた? セーターの沈黙を聞いて』4行目:『味。セーターの味について』5行目:『どんなにおいがする?』6行目:『セーターは何を願っている?』全ての行にひとつずつ比喩を入れることが条件とされている。
	5	書いたものを読み合う	『～の行が好きだ。もう一度読んでみて』と促すコメントが多い。同じ対象物でも全く違う詩ができていることから、自分と同じ世界を見ている者は他にいないことを確認する。
4 五感②	10	タイトルをつける	セーターを着た人について『このセーターを着た人が、どんな見た目、何をしている人かを想像して』その人物の職業をタイトルとしてつける。『僕なら釣り師かな』と例を挙げる。
	30	質問に答えながら五感を使って詩を書く	1行ずつ設定した人物について質問→書く、という順番。1行目:『仕事に見ているもの』2行目:『何を触っているか』3行目:『その人物の行動によって生じる音』4行目:『どんな味を感じているか』5行目:『どんなにおいがするか』6行目:『I wish (私は～をしたい)』から始めて自由に。全ての行にひとつずつ比喩を入れる。
	8	読み合い、タイトルを当てる	数人が書いたものを読み、どのような人物について書いたかタイトルを当て合う。『本当は全部の行に比喩を使う必要はないが、比喩は役立つ方法のひとつだと思う』と説明する。
5 視覚的な動き	50	<i>The Jaguar</i> (Ted Hughes)を読む *〈猿はうなり太陽の中のみを(愛する)〉から始まる詩であり、全20行。(愛する(adore)の箇所は空欄、空欄は全6箇所。)	数カ所が()で空欄になっている詩が配られ、ペアになって空欄を埋める。全員で読み進めながら空欄の答えを聞き、詩の文脈の中で意外なことばの選び方がなされていることが読み手に驚きを与えるということを確認する。『どうしてHughesはこのことばを選んだんだろう?このことばを入れることによってどんな感じ、どんな意味になる?』と聞き、話し合う。最後に、『全ての単語は、とても驚くようなことばだ。そうした驚きをもたらすことばは、どうしてそこにあるのかということを考えるのは自分でもできることだと思うからやってみて。』としめくくる。
	25	<i>About His Person</i> (Simon Armitage)を読む	1人が読み上げた後、連にまたがって文章が続いていることを確認し、モチーフを並べることでどのような物語が描かれているかということ話し合う。
5 視覚的な動き	4	詩の説明、創作の課題提示 *〈小銭で5ポンド50きっかり〉(訳は四元・榎木(2008:170)に拠った)から始まり、その場面で見えた物をリストのように並べることで物語を描く、全20行の詩。	『この男性(詩の作者)は、何が起こったのかということについては何も説明していない。この詩は、小さなオブジェクトがただ並べられているだけだ。ただのリストだ』と見える物を並べるだけで物語る詩であることを説明し、『自分の詩を書いてもらいたい。同じように、対象物のリストを作ることで。自分の記憶を思い浮かべて…この詩のように、対象物のリストを作って物語を書いて。その記憶が起こっている場所で見えるものを、視覚的な動きだけで表現して。』と示す。ここでは課題の提示のみで書く時間は設けない。

『』はチューターであるDunnの発言。「分」の列は各活動に要した時間。

表4 水曜日の活動（2011.09.07実施）詳細

	分	活動	活動の詳細
6 自分の名前	2	名前について話し、1人ずつ自分の名前を言う	『今日は赤ちゃんにつける名前の本を使います！名前は1人1人が持つるもので、それぞれのアイデンティティでもあると思う。同じ年齢だけ一緒に生きてきたでしょう』と説明し、1人ずつ自分の名を言う。
	10	自分の名前の意味について話す	『自分の名前の意味を知ってる？』と聞き、詳しくは知らないと言う参加者に対しては名付の本を取り出して調べ、読み上げる。最後に、自分の名前の意味も付け加える。
	4	レッスンの説明	『あなたが、自分の名前と生きてきたという自伝ね。』『あなた自身を、あなたの名前を持った不思議な人（magical person）として考えてください。私がしてもらいたいのは、あなたのライフストーリーを書いてもらうこと。まるであなたの名前を授けられた人が、育っていくみたいに』と説明し、書き始めの例をいくつか挙げる。
	20	自分の名前の意味を使って自伝詩を書く	『最初の下書きが書いても、それで終わりにしないで欲しい。下書きを書いている時は、自分の想像力を使うことやファンタジーの世界に入ることを楽しんで』と強調。
	20	数人が書いた詩を読む	『すごくいい』『～ということばを使ったアイデアがいい』とコメントする。
7 私が信じているもの	9	<i>What I Believe</i> (Michael Blumenthal) を読む	1人1行ずつ読み、『具体的な連もあれば、抽象的な連もあるね』と言い、数人がそれぞれ自分の読んだところや、好きなどを言う。特に解釈は求めない。『同じことばの繰り返しを連の最初に使うというこの詩人のやり方は、詩を作るのに使える方法だ』と説明しすぐに次の詩に進む。
	8	<i>What Do I Really Believe?</i> (Selima Hill) を読む	1人1行ずつ読み、数カ所についてチューター自身の感想を述べながら数人にも感想を求める。
	3	想像と〈I believe〉の関係について説明し、小さい頃に信じていたものを話す	『I believe ~』を使えば、世界をあなたの好きなように変えて何でも書くことができる』『あなたの想像の世界を楽しみましょう』と説明し、『小さい頃何を信じていたかということについて考えることは役に立つということを発見した人もいました。何か信じていたものはある？』と聞く。数人が話すと、『美しい。ファンタスティック。』とほめる。『とにかく、何も気にしないで。あなたの個人的な、心の中で信じているものと想像力を結びつけることをおそれないで』と言い、詩を書く作業にうつる。
	20	信じているものについて詩を書く	『1つめのように3行の連でもいいし、2つめみたいに2行の連でもいいし、シンプルに書こう。ただ遊ぶことを楽しんで。believe を feel とかに変えたかったら変えてもいい』
	5	書いた詩から1連ずつ選び、1人ずつ順番に読む	1人ずつ自分の詩から好きな1連を読み、口頭で全ての行が「I believe」から始まるグループポエムを作る。『自分の書いたものをまた再配置してみたら何が起きるかということを考えてみて』と説明する。
8 シフト・ポエム	8	ことば集め（パーティーと葬式）	紙を左右に分け、左側の上部に「パーティー」と書き、「パーティー」と聞いて思い浮かぶものを1人1人ずつ順番に挙げていき、それを「パーティー」と書いた側の上から下に並べる。その後、右側の上部に「葬式」と書き、同様に思い浮かぶことばを順番に挙げ、上から下に並べる。
	1	ことばを入れ替える	並べたことばはそのままで、上記2つのタイトルを入れ替える。パーティーのことばを使った「葬式」か、葬式のことばを使った「パーティー」のどちらかを選ぶ。
	30	ことばを入れ替えることで作られたタイトルから連想した場面について詩を書く	15個のことばを使うため15行の詩を書く。『ことばがおかしな文脈に置かれることを楽しんで。とても楽しいから。あなた自身に挑戦してみてください』と付け加える。時制や形の変更、行の追加などは自由に行ってもいいと途中で言いながら、Smith自身も書いている。
	13	詩を読む	『一部分でも全体でもいい』として数人に読むように言う。『最初の行、もう一度読んでくれる？』などコメント。『変わったことばを、普段の文脈に置くだけでこんなに変わる』と説明し、意味を持つこと、意味がつながっていることを気にせず大胆に書くことを推奨する。

『』はチューターである Smith の発言。「分」の列は各活動に要した時間。

表5 木曜日の活動 (2011. 09. 08実施) 詳細

	分	活動	活動の詳細
9 日常生活と比喩	4	ウォームアップ	それぞれ、「羊」から思い浮かぶことばを書き並べる。
	1	日常生活の活動を思い浮かべる	チューターが普段の行動について話し、極めて日常的な行動（歯磨き、食事など）についてそれぞれ思い浮かべる。
	2	戦争に関係することばを挙げる	『戦争と言えばどんなことばが浮かぶ？』と聞き、参加者から攻撃、ミサイル、防御、敵などが挙がる。
	4	4～5行の詩を書く	思い浮かべた日常生活の行動について、「戦争」にまつわることばを使って4～5行の詩を書く。その後タイトルを当てると説明する。
	5	4～5行の詩を書く	同じ方法で「愛」にまつわることばを使って4～5行の詩を書く。『素晴らしく輝く愛、失恋、恋愛成就など…』と例を挙げる。
	7	読み合い、タイトル当て	4人が書いた詩を読み、そこで書かれた日常の行動とは何かということ当てて。読む→タイトルを当てて→『いいね、じゃあ他に読んでくれる？』と手際よく進められ、特に書かれたものに対して特定のコメントをしない。書きかけであることも問題ではないと言う。
	2	比喩の説明	『直喩や隠喩を使うということは、まずその対象についてとても注意深く見るということを求める。そしてあなたたちが何をどのように見ているのかということを読者に示す働きを持っているんだ』と比喩の使用が意味することを説明する。
10 動物	1	タイトルをつける	動物園の動物を思い浮かべて、それをタイトルにする。
	11	思い浮かべた動物について、右のようなチューターの質問に1文ずつ答える形で詩を書く。	(一文が2行、4連の詩) 第1連:その動物はどんな特徴を持っている？ / 第2連: その動物はどこに移動したい？ / 第3連: ご飯の時にどんなことを願っている？ / 第4連: 天気が急に変わりました。さあ、その時何が起った？
	2	書いた詩を読む(2人)	『いいね、ありがとう』のみコメント。
	15	書いたものを一連(4分)ずつ質問に答える形で書き換える	第1連: 重工業のことば / 2連目: ガーデニングのことば / 3連目: 学校生活のことば / 4連目: 音楽のことば
	7	書いた詩を読む(4人)	『いいね』『ありがとう』と褒める。全体や連を二度読ませることもある。第1稿と比べることで、書き換える前後の違いや変化を際立たせることもする。
	31	<i>Killing Time</i> (Simon Armitage) を読む *〈話変わってコロラド州のどこかで〉という行から始まる詩であり、たくさんの花が咲く花畑を比喩に用いて銃撃事件や空爆の被害者について語った、全千行。そのうちの70行。	タイトルを隠して提示し、3人が順番に音読。『どのように感じた？』と質問→「死が尊重されている」「戦争のことが描かれていると思う」という意見が出る→花が象徴するもの(無邪気・美しさ・健康・脆さ等)について考える→「花は殺される人、子どもを表している」という意見が出る。作者がこの方法で語った理由を聞き、ひとつの出来事(ここではイラク空爆やコロンバイン高校銃撃事件でたくさんの子どもたちが殺されたこと)について全編を通してひとつのモチーフ(花畑)による比喩を使いながら語られているということを確認する。
	2	詩の書き換えに向けた説明(課題提示のみ)	Armitageの詩と同じように、先に書いた動物の詩全体を1つのテーマに沿って書き換える。先に書いた4つから選んで書いても、新しく自分で作って書いてもよい。
11 バレンタイン	12	<i>Valentine</i> (Carol Ann Duffy) を読む *真っ赤なバラでもサテンのハートでもない/あなたに玉ネギをあげるから始まりバレンタインに玉ネギを恋人に渡すことで気持ちを伝えようとする。全23行。	1人が音読。『どうしてバレンタインの日にバラでもなくハートでもなく、タマネギなんかをあげたのだろうか？』と聞き話し合いのきっかけとする。タマネギにまつわるモチーフが暗に意味しているものについて話し合う。使われていることばが詩の中では普段と違って何を意味しているのか、そのことばを使うことによって他の行にどのような効果をもたらしているのか、ということを集散的に読み込ませる。
	4	模倣による創作の説明(課題提示のみ)	『このタマネギのところに、違うオブジェクトをはめこむことであなたの詩を書いてみて』と言い、詩の構造を模倣する形で詩を書く。『ろうそく、セーター、電球、バレンタインにあげそうにないものがある』と例を挙げる。
	10	残った時間で詩を書く	この時間内ではなく最終日までに満足のいくものが書ければよい。

『』はチューターであるDunnの発言。「分」の列は各活動に要した時間。

表6 金曜日の活動 (2011. 09. 09実施) 詳細

	分	活動	活動の詳細
12 過去の体験	2	レッスンの説明	『自分の人生についてよく観察しましょう。例えば、人生のある瞬間、恥ずかしかった時とか混乱した時…そういう時に、誰かと話している瞬間について書きましょう』と説明し、プリントを配る。
	5	<i>Haubris</i> (Neil Rollinson) を読む *〈この少女を切望する〉から始まる、父に悩む少女の訴えを描く詩。全20行。	参加者の1人が音読し、詩の中で何が起きているか話し合う。数カ所について、登場人物はどうしたいと思っているのか、なぜそう考えるのかということなどを数人が話す。『これはきっと真実に基づいて書かれたものだと思うんだけど、皆さんはこれに似たような体験をしたことがある?』と尋ねる。
	12	<i>The Clasp</i> (Sharon Olds) を読み、話し合う *〈彼女は4歳、彼は1歳。雨の降る日に風邪を引いて〉から始まる、全24行の詩。	『会話がたくさん使われていて、一切韻律を使っていなくて、詩らしい詩ではない作品』と紹介し、1人の参加者が音読をする。小さな子どもが怒った母親とのトラブルに巻き込まれる様子を描いた詩。『何が見える?』という質問をきっかけに話し合いを進める。子どもを持つ参加者が、自分の子どもが小さい頃に叱った思い出を話す。
	25	自分の恥ずかしかったり戸惑ったりした経験について詩を書く	『あなたたちに今から恥ずかしかったり戸惑ったりした瞬間について書いてもらおうと思っているから、この詩を例として見せたかった』と説明。『誰かとの関係の中でこのことを書くといいかもしれない。家族とのことが書きやすいかもしれない』『あなた自身を、詩を書く素材として見るよう挑戦してみて。あなた自身が、一次素材。あなたの人生そのものが、ユニークなもので面白いもの』と励ます。
	30	書いた詩を読みながらその経験について話す	1人ずつ読み上げる。笑いが起こる。『とてもいい』『よく書けてる』とほめながら、好きな行や気になる行をさしてもう一度読むように促す。
13 まきもど詩	12	<i>Home Movies</i> (Michael Laskey) を読み、話し合う *〈ビデオの最後のコマまで〉から始まる、結婚式のホームビデオを巻き戻し再生する様子を描いた詩。全60行。	『物事が起きている時間の枠にとらわれることなく見ているもの。映画やビデオを、巻き戻しながら見たことある人はいる?』と聞き、次に読む詩が何らかの出来事を巻き戻して書いたものだということが示唆される。その後、1人ずつ順番に1連ずつ音読する。『何かの経験を巻き戻すことは、同じ経験を全く別のものにしてしまうという面白さがあると思う』と述べ、この表現方法が持つ意味について説明をする。その他、参加者数人が好きな行などを指摘する。
	5	異化することについて説明する	『技術的用語で言うならば…経験を異化することになる。馴染みのある経験だけど、もし巻き戻しという魔法を使ってそれをひっくり返したり、あらゆるものを巻き戻して再生したら、それは異化していることになる。結婚式のビデオを巻き戻し再生してみたいに、いろいろな経験を巻き戻し再生してみると、どんなものでもすごく違ったものになる』と説明。
	25	経験をまきもどした詩(“まきもど詩”)を書く	『難しいかもしれない。だからまずあなたは何が起こったかということをもまま書いたらいいと思う』『いろいろな角度からその経験を振り返ることになる』と説明。『水へ飛び込む、自ら飛び出す、パーティー、電車に乗る、電車から降りる、雨が降り始める、雨がやむ、雪だるまを作る』と思いつくだけの例や書き出し例を提供する。その間、参加者は書き続けている。
	15	書いた詩を読む	数人が読む。詩が読まれるたびに『素晴らしい』『見事だ』『彼女はあんなに日常的なものを異化できている。巻き戻すだけで!もう一度読んでもらえる?』と言う。『日常の経験を巻き戻すことで異化すると、一瞬で変わったものにすることができる。本当に見事だった、素晴らしい!』
14 擬人化	11	<i>A stone in a drystone wall</i> (Peter Sanson) を読み、話し合う *〈この壁の中で長いこと暮らして〉から始まる、石の声で語る全22行の詩。	1人一行ずつ読むように示し、この詩の特徴である擬人化について説明する。壁に埋め込まれたたくさんの石の中の1つが、自分の仲間や自分のことについて語るという内容であるが、読み込んでいくにつれて単なる壁と石について語られているのではなく、地球規模の視点から見ると、その壁がことばの壁を比喩的に表したものである。
	5	擬人法を使って詩を書くことの説明	『声の詩を書いて欲しい。声…何かに命を吹き込んだ、声。』と説明をした後、『ショップウィンドウとか…ベッドルームの壁、スプーン、夜中の浜…これは面白い例だと思う。小さな机の上にある読書灯とか…プラスチックの机…ボトル。なじみのあるもの、何でも考えて書いてみて』と思いつく例をたくさんあげる。『何も心配することないから、楽しんでね。それは下書き。完成させる必要はない』と未完成でもよいということを強調する。

『』はチューターであるSmithの発言。「分」の列は各活動に要した時間。

①ルールと自由のバランス 全てのワークショップを通して全部で14種類の詩を書く活動が取り入れられているが、どの活動においても課題となる書き方のルールは非常に単純なものである。「5 視覚的な動き」「7 私が信じているもの」「11 パレンタイン」「12 過去の体験」「13 まきもど詩」「14 擬人化」のように詩を全員で読み合ってから詩の創作に入る場合は、直前に読んだ詩の持つアイデアや構造を借りたり、ことばを入れ替えたりすることのみがルールとして示される。何も読むことなく書く場合には、「2 直喩と隠喩」「3 五感①」「4 五感②」「9 日常生活と比喩」「10 動物」のようにチューターの出す質問に答えるだけで自然と行と連の形式ができあがるような仕組みになっているものと、月曜日に行った「1 ことばあそび」と同様に、簡単なルールに従いながらことばを操作することで自動的に想像の世界をうみだしていく契機とする「8 シフト・ポエム」に分けることができる。「6 自分の名前」はテーマだけを与えられて書くものとなっている。

それらの簡単なルールを手掛かりに、書き方や書く内容は自由となっている。その時、書き手は自由に試行錯誤をする機会を得る。しかし、ルールの提示だけではことばを選んだり決定したりすることを難しいと感じる者もいることは予想がつく。そのため、チューターはそうした自由さが強い場面では、書き出しや書く内容について思いつく限りの例をその場で並べ、ヒントにすることができるようになっていた。参加者は書きながらそれが耳に入ってくるので、そこから連想したり広げたりすることもできれば、それをそのまま使うことも許され、またそれを全く使わないことも可能である。

②書く仲間としての指導モデル 書く時間においては常に、チューター自身も紙に向かって同じように書いていた。つまりチューターは参加者と同じ「書く人」としてそこに座っていたのである。これは、課題を与え、書かれたもののよしあしを審査するという教師の役割からの完全な発想の転換を要する。つまり、その場でのチューターと参加者の関係は、〈教える－教えられる〉、つまり〈書かせる－書かせられる〉といった教授の関係ではなく、共に〈書く仲間〉として成立しているのである。創造・想像活動を与え導くだけでなく、

チューター自身がそうした活動と経験とその時抱く思いを参加者と共有していくことが求められている。共有しながら導くという Arvon のワークショップの基本形態は、チューターがまさに「作家＝書く人」であることによって自然と成立している。Arvon がイギリスの国語教師たちにも受講が推奨されていることは冒頭で述べたが、それは教師自身がこうした体験をじっくりと味わうことで彼らの指導モデル観の転換を促すことにつながると考えられているからだと推察することは許されるだろう。

③未完成な下書きの推奨 書いたものはシンプルなことばで賞賛され、好きな行、連、ことばを指摘することによって全て肯定的な扱いを受けた。またその場では読み上げられた詩についての詳細なコメントや話し合いは一切せず、ただ書いたものを共有するのみであるということは非常に特徴的である。それは、その場においては周りからの評価が下されないということの意味する。そうすることによって場の空気は共感的なものとなり、書いたものを周りに発表する際の不安や恥ずかしさが軽減される心地良さを持ち、積極的な共有の意志をうみだす。

また、活動の中で決められた時間内に書き上げるということ自体は重要視されていない。レッスンの中で書いたものは「下書き」であると強調され、後で書き直したり同じような表現方法に挑戦し直したりすることを示唆される。むしろその時点では未完成なものであって当然と扱われていた。そうすることで参加者のプレッシャーを取り除き、自由な試行錯誤を損なわないようにしていた。

④読む・書く・聞く・話すという言語活動全てが自然な文脈を持った展開 全体的に書くことを中心としたワークショップである一方で、その中に詩を読むことや相互に話したり聞いたりといった言語活動全てが自然に配置されている。それは、5日間のワークショップの全体構成からも指摘した特徴であるが、ここでは、〈表5〉に示した木曜日のライティング・ワークショップでの「10 動物」を取り上げて活動の中で具体的な言語活動について考察を行う。なお、以降のチューターの発言は全て木曜日のライティング・ワークショップ（「10 動物」：2011年9月8日実施）の記録による。

「10 動物」では、動物園にいる動物をひとつ思い浮かべ、チューターの質問に答えながら2行1連ずつその動物についての詩を書く活動が中心となっている。(〈表5〉参照) その質問に答える形で行と連をうみだし最終連では何らかの変化をつけて締めくくる手法が用いられている。これらの質問を頼りに稿者によって以下の詩が書かれた。

自分で描いた／おりの中に入ってる／／マン
ションの屋上で／日焼けしたいと思ってる／／
たまには 俺も肉食だぞって／言ってみたい／
／突然 雨が降ると／彼はおりから出ることが
できました

1連目は、まど・みちおの「しまうま」[まど1992:20]を借りることによってひとつめの質問であるしまうまの「特徴」として書き、2連目以降はそれぞれ質問に答える形で書き進めている。ここで書かれた詩は「動物の詩」の第1稿であり、これをもとにして活動の中で第2稿、第3稿を書いていくこととなる。その後は数人が読み、Dunnはその都度「いいね、ありがとう。他に?」とコメントをしている。

次に、第2稿では「重工業／フラワーガーデニング／学校生活／音楽」を連想させることばを使って、1連につき4分ほどの時間を取りながら、質問に答える形で順番に書き換えていった。ひとつの詩を通して書き換えるのではなく連ごとに別の比喩を持ち込んで書き直していくという作業は、次に続く詩の読みと関係を持っている。以下はこの第2稿である。

自分でつくった／おりの中に入ってる／／緑色の
屋上に移り住んで／日焼けしてみたい／／たま
には給食のおばちゃんに／僕も肉食なんだよっ
て 言ってみたい／／雨がふり始めたら／その
音はまるで解放の歌

1連目はまどの詩を借りた「おり」ということばがそのまま重工業のことばを使った比喩として成立していると判断し、書き換えなかった。2連目は「マンションの屋上」が「緑色の屋上」、3連目は動物園の飼育係を表す比喩として「給食のおばちゃん」ということばを付け加えている。そして4連目は「おりから出ることができました」という表現が「その音はまるで解放の歌」というように「音楽のことば」を用いて書き換えている。

第3稿目は、第2稿目が連ごとに異なる比喩を

用いて書いていたことに対して詩全体を1つのテーマに沿って書き換えるように、つまり音楽なら全ての連を音楽のことばで書き換えるように指示が出されている。その作業において書き換えられた「しまうま」第3稿が下記である。

お手製の／鍵盤のおりに入ってる／／夢は
でっかく／屋上ライブ!／／たまには言ってみ
たいよ／あのバイオリンの弓は 俺の獲物だっ
たんだぜ!／／突然のどしゃぶり雨は／まるで
どこからか聞こえる解放の歌

しまうまの「しま」はピアノの「鍵盤」に喩えられ、「屋上」には「屋上ライブ」と付け加え、肉食獣の獲物である草食動物(馬)を、バイオリンの弓の原料である馬の尾と重ねて「バイオリンの弓は俺の獲物だった」と書き換えている。第4連目は第2稿と同じ「解放の歌」を比喩として用いている。

この第2稿と第3稿の作業の間には、Simon Armitageによる*Killing Time*を読む活動が挟まれている。*Killing Time*という詩のタイトルは伏せられた状態で全員が詩を読み進めていく。この詩は花、花びら、咲く、など花にまつわることばが多く用いられ、たくさんの花が咲く花畑を比喩に用いて、1999年に起きたイラク空爆やコロンバイン高校銃撃事件の被害者をひとつひとつの花に喩えて語った詩である⁵。それを踏まえて、話し合いではひとつの出来事について全編を通して花畑というひとつのモチーフによる比喩を使いながら語られているということが確認された。

*Killing Time*の読みは、「動物」というテーマでの創作活動の途中に挟まれているが、その内容は「動物」とは無関係で独立した活動のようにも見える。しかし両者は、比喩を使うことで対象物への自分の見方を浮き彫りにさせるという点で結びつきを持つ。詩を読む前に参加者はほとんど比喩を使うことに意識が向けられている状態であったため、詩の中で用いられている表現技法に焦点を当てることによって読みを深めることが可能になっている。さらにその読みは、それまでに書いた「動物」の詩を書き直す手がかりにもなるという意味で〈比喩表現〉の体験をすることを意味する。このようにして話し合いや読み合いを媒介として読む活動と書く活動とがつながられ、それによって、対象物の捉え方を更新していく作業と

なっている。何かを別の何かで喩えるために両者の関係をくまなく探求しようとする対象物に対する〈観察〉という文脈の中に、全ての言語活動が自然と位置づけられているのである。

学校における授業開発に取り組むにあたり、詩の読み書き関連指導は避けて通ることのできない課題である。このワークショップの中では、詩の創作と詩の読みは個々が独立した活動として成立していると同時に、相互に結びつきを持っていた。それは、教科書教材としての詩の読みの深まりと子どもたち自身のことば表現の広がりとは相互に関連しながら高められていくような詩教育の一環としての、詩創作指導の在り方として可能性を持つ。

4 学びを形成する詩創作教室の姿

(1) 学びを支える力

ことばを使って想像の世界を広げていきながらことばについての新しい発見と認識の深まりを終わり無く繰り返していくということばの学びを支えるために、本ワークショップは参加者にとってどのような〈場〉として機能したのだろうか。

ワークショップでは様々な表現方法を体験する活動そのものが中心となっており、時間内に詩を書き上げないことが大きな特徴だった。つまりここで重要とされていることは、ワークショップの中での様々な表現体験であると同時に、そうした体験とそこで生まれた下書きを契機として、その後も1人で書き続け、また書き直し続けるということである。

ワークショップ内や個人指導の中での、チューターからの多くの肯定的な励ましや声かけによって様々な不安は取り除かれ、メンバーの中には〈自己肯定力〉が生まれる。その〈自己肯定力〉を動力としながら、チューターの声かけに倣って他のメンバーをも受け入れていく〈共感力〉を身につけていく。実際、後半になるにつれてワークショップの中で書いたものを他の参加者が読み上げた時に一言賞賛のコメントをつける者は増えていった。このように、不安やプレッシャーが軽減されることによって自分を受け入れ、その心の余裕が他を受け入れるという、共感的共有の雰囲気生まれる。その雰囲気に励まされながら、最終的に詩集に編むという大きな目標が設定される。

その目標に向かって書き続け、書き直し続けるという〈継続力〉を養っていった。

(2) 持続可能な詩創作指導の実現へ

長期的・継続的な詩創作指導のカリキュラム開発にとって、焦点を当てる力に関する発想の転換は重要である。上記のようにことばの学びを支える力は、1回限りの指導では決して身につかないものである。むしろそうだからこそ、一度の努力で成果が出ないという困難さに向き合う機会を教室に持ち込み、それを乗り越える力を身につけるような、他のことばの学びに貢献することのできるものとして詩創作指導を位置づけることができるのである。書いていくうちにもっと書けるということを実感し、ことばをつなげて新しい世界をつくりあげるといふことの味を知る。そのように詩を書く世界に何度も参加し、十分に体験することそのものが、様々な領域につながっていく線を多分に含んでいる。

ワークショップの終わりに一冊の詩集を編み、朗読会として発表することも、学期の終わりや学年の終わりにおける学びのまとめのあり方を考える上で重要な手がかりとなる。ワークショップの共感的な環境において様々な表現方法を繰り返し経験する中で養われる〈継続力〉の駆動力となるのが、近しい目標である詩集の編纂とそれを全体に向けて一人ずつ朗読する活動だった。それはワークショップの中で書いたものを〈下書き〉と捉え、その後も発展することが前提になることを可能にする装置でもある。詩集におさめる詩を選ぶことは、書いたものとその経験に対する自己評価を必要とする。そして時間をおいて振り返ることは改めて書き直したいという欲求にもつながり、それは書いている時の自分自身の選択や評価を更新させていく営みとなり、新しい学びへの出発点ともなる。

しかしその詩集編纂と朗読会が参加者にとっての詩創作史のゴールではないということも重要である。講座終了後に参加者から出された、「自分の詩に取り組んだり高めたりし続けようと思っている」「書き続けることにとてもわくわくしている」「ワークショップの間に刺激されるだけでなく、家で取り組むアイデアを与えてくれた」という感想にも現れているように、1つの大きな目

標を達成してもなお続けようという思いが生じている。それはワークショップにおいて〈自己肯定力〉〈共感力〉〈継続力〉に支えられた体験を繰り返すことで、一回の努力では完成された成果を得ることができないという困難さや、それに対して自分自身の選択と評価を求められるという困難さに対する肯定的な意識を育てたことを表している。

その意味で、メンバーの中には、失敗することや終わりのない営みに対する〈忍耐力〉が養われ、その持続可能な詩創作指導の実現を可能にする。

5 結語

本稿では、Arvon の詩創作ワークショップの実際を分析することによって、その具体的な指導の進め方と子どもたちの学びに対して持つ示唆について探求した。ワークショップ型の詩創作指導には、創作に向かうたくさんの刺激があり、共感的な雰囲気の中で自然な文脈を持ったあらゆる言語活動を行き来する指導展開の特徴を捉えることができた。

そうした「場」の中に、参加者が自分に自信を持って他に共感し、正解も終わりもない作業に耐え、そして続けて自分でも取り組み続ける力を身につけることができるという可能性を見出してきた。他の参加者と共に反応と共有をくり返すことで、自分のことばを見つめ直し、他のことばに関心を持ち、それを新たな刺激として受け止めていくのである。

それは、紛れもない〈詩を書く共同体〉の形成を意味し、さらにチューターも参加者と同じようにその共同体の一員として存在していた。そこで書かれたものは、質の高い素晴らしい詩だと言われるようなものではないかもしれない。しかし、その共同体は素晴らしい詩を書けるようになるための〈詩人の共同体〉ではなく詩を書くことそのものをめざす〈詩を書く共同体〉であり、両者は明確な違いを持っている。そして教室において私たちが子どもたちと共に形成するべきは、〈詩人の共同体〉ではなく、子どもたちひとりひとりが自分の挑戦を試み続けていく〈詩を書く共同体〉である。このことは、国語科において詩創作指導が担う役割に関する発想の転換をもたらし、継続的な詩創作指導の実現へと向かう可能性を導くものである。

【付記】

本稿は、稿者の学位論文「イギリスにおける詩創作指導の理論と実践」(2013年、広島大学)第3章第2節「ワークショップ型詩創作指導による学びの形成」の内容を一部加筆修正したものである。

【Acknowledgements】

I would like to express my deepest appreciation to the Arvon's staffs, tutors and the participants for their permission to record and use this workshops. Without their encouragement and advice, this article would not have materialized.

【註】

1. 全国展開されている Poetry School (1997年設立)、Liverpool を拠点とする The Windows Project (1981年設立) などがある。
2. Brownjohn (1994), Dymoke (2003), Wandor (2008), Dourneen (2010), Goodman & Maitland (2007) など。
3. <http://www.arvon.org/course/> (2015年12月4日閲覧)
4. この活動を日本で行える詩創作ワークショップとして再構築したものについては、山元・中井 (2013) にて報告している。
5. アーミテージ／四元他訳 (2008) p.183に、この詩の背景についての解説が載せられている。

【引用参考文献】

- ARVON Foundation (2011) *INSPIRES: The foundation for creative writing courses 2011*
- BROWNJOHN Sandy (1994) *To Rhyme or Not to Rhyme?* Hodder Murray
- DYMOKE Sue (2003) *Drafting and Assessing Poetry: a Guide for Teachers*, Paul Chapman Publishing
- DOURNEEN Jean (2010) Setting free the spirit of English in the Brecon Beacons: The value of learning outside the classroom, *English in Education* 44 (1), NATE, pp.59-75
- GOODMAN Martin and MAITLAND Sara (2007) *The Write Guide: Mentoring The essential handbook for emerging and established writers*, New Writing North.
- LOCKE Terry (2010), Reading, writing and speaking

- poetry, in *The Routledge International Handbook of English, Language and Literacy Teaching* (Dominic Wyse et al. ed.), Routledge, pp.367-377
- MACKAY D.D. (1969), *Teaching English as the Mother Tongue*, in *Children at School: Primary Education in Britain Today*, (YOUNG Brian ed.), Heinemann
- MOAT John (2005) *The Founding of Arvon: A Memoir of the Early Years of the Arvon Foundation*, Frances Lincoln Limited
- MOAT John (2011) *The Gist of Arvon*, Centre for South West Writing at University of Exeter
- THORNTON Geoffrey (1974), *Language, Experience, and School*, Edward Arnold
- WANDOR Michelene (2008) *the author is not dead, merely somewhere else: creative writing reconceived*, palgrave macmillan
- 中井悠加 (2012) 「イギリスの国語教育における詩創作指導論の展開：国語教育雑誌 *English in Education* の調査を中心に」『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部，文化教育開発関連領域』第61巻，pp.143-152
- 山元隆春・中井悠加 (2013) 「詩人の時間を体験する」『月刊国語教育研究』498号，pp.64-65
- まど・みちお／美智子 (1992) 『THE ANIMALS どうぶつたち』文藝春秋
- 山元隆春 (1996) 「詩的経験の成立をめざす詩の学習 — 英国の中等学校における実践を中心に —」『論叢国語教育学』第4巻，pp.1-18
- S. アーミテージ／四元康祐・榎木伸明 (2008) 『キッド』思想社